

## 《研究ノート》

### 現代社会の諸問題と日蓮宗教化

## 新興宗教と日蓮宗教化

### (1) 研究視角

一般的に、新興宗教とは幕末期より明治・大正・昭和三代にわたって成立し展開してきた、近現代に新興し形成されている宗教と宗教集団を指している。しかし、その内容に関しては「新興宗教」という概念では一括しがたい多様性・複雑性に彩られている。その総数は凡そ二、〇〇〇を超えるといわれ、きわめて流動的である上、内情は尚秘密のベールに閉ざされている面も多い。

こうした新興宗教の中に、「題目系新興宗教」と称される宗教集団が存在し、その組織の巨大さや政治的影響力あるいは宗教活動の活発な展開などによって宗教的にも社会的にも注目を集めていることは周知の通りである。

だが、この「題目系新興宗教」という概括的な枠組み

は一応承認出来るとしても、ひとたびその信仰教義内容、布教活動、組織形態などを検討すれば「題目系新興宗教」のあり方にも共通点よりは相異点が著しいことに気付くのである。

筆者は最近刊行された松野純孝編『新宗教辞典』（東京堂出版・昭和五十九年九月）の執筆者の一人として参画したが、同書に収載されている約二〇〇の新興宗教集団の概要を通覧するだけで、新興宗教の複雑多岐な種々の側面を垣間見ることができるのである。このうち筆者は、創価学会をはじめ主として「題目系新興宗教」と称される集団に関する項目を執筆したが、ここで痛感したのは組織の大小にかかわらず、成立事情はもとより「本尊」「教え」「用語」「儀式行事」「布教活動」「組織」全般にわたって、ある程度は表相上の共通性を示しながら内実はまったく相異しながら存立展開していることであつた。これらの点は集団がちがう以上当然のことではあるうが、一般的には「へみな同じ仏教」とか「へどもお題目を唱えているから同じ」などに見做され、信仰や教えより、もいわゆる現世利益をもたらず新興宗教集団の精力的な

姿に目を奪われている傾向が強い状況にある。その意味では、法華系、日蓮系や脱法華・脱日蓮系など種々入り乱れ、表面上〈通題目〉の状況を呈しながらそれぞれが集団の会長のカリスマ化や指導下で教勢の維持拡張を図る「題目系新興宗教」の現状とその共通性、異質性を改めて再把握することが重要ではないかと考えられる。

## (2) 研究姿勢

右の視角にもとづいて、われわれが新興宗教を取り上げ、特に「題目系新興宗教」を再検討するのは、「題目系新興宗教」自体を把握するだけではなく、日蓮宗の信仰・教義・布教・組織などの各面と対比させ「題目系新興宗教」を現代宗教における反面の鏡としつつ、現代における日蓮宗のあり方・教化の内容と方策を見直すことにあ  
る。「題目系新興宗教」への主体的・実証的な考察なしに、それに対する対応策も日蓮宗の現代における方向性も十分導き出すことはできない。とりわけ、〈通題目〉の状況という局面を主題として、日蓮聖人の題目観にもとづき日蓮宗の唱える題目と「題目系新興宗教」のそれとのちがいを明確化することは、「お題目総弘通運動」を

推進する日蓮宗にとって大切な命題と言えよう。これなしには、日蓮聖人の創唱した題目を宣揚し破邪顕正に取り組み、日蓮宗の教化活動を活性化させてゆくことはできないのである。

## (3) 研究項目と方向

①新興宗教のうち、まず「題目系新興宗教」の信仰・教え・儀式行事・布教活動・組織状況について検討すること。

②右のうち、「題目観」の相異を明らかにすること。

③日蓮聖人の信仰教義の考究にもとづき「題目系新興宗教」の「信仰」「教え」などを研究すること。

④関係の著述・論文・資料を集めて主体的・客観的に考察をすすめること。

⑤「日蓮宗と『題目系新興宗教』のちがい」「日蓮宗のお題目と立正佼成会の題目とのちがい」などの平易な解説書をまとめること。

⑥「題目系新興宗教事典」をまとめる方向で研究調査をすすめること。

⑦「題目系新興宗教」あるいは新興宗教に対する日蓮

宗のあり方ならびに日蓮宗の教化活動における新興宗教への対処策、教化の内容・方策・進むべき方向を基本として本問題を考えること。

(現宗研主任・石川教張)

## 高齢化社会と日蓮宗教化

高齢化社会は、出生率の低下や死亡率の低下・平均寿命の伸長などの要因によって起こり、先進国特有の現象である。人口高齢化によって発生する問題は多岐にわたるが、個人におけるところでは、ライフサイクルの変化による長い老後生活の安定、社会においては、高齢者を支える負担の増大や社会全体の活力減少など、大きな問題が現われる。特にわが国では、他の先進諸国に比べて高齢化の進む速度や程度が著しい点に特色があり、しかも経済的に低成長期に入ってから今後十分な対応が果たせるものか、大きな不安をかかえている。問題解決のために行政側の施策はもとより、民間における対策も不可欠で

ある。そして何よりも、高齢者自身の自覚と自助努力が望まれている。こうした状況下、日蓮宗の寺院「教師の果たすべき役割は何か。教化の対象が依然として中・高年齢層にとどまる現状の中で、高齢者に対する教化の方策は十分であるのか、という問題を点検することが必要である。

本年度の研究においては、右の目的の前提として、次のような問題点について整理を試みた。

- ① 日本の高齢化現象の現状と動向
- ② 高齢化社会の定義・要因・発生する問題点
- ③ 高齢者（老人・老後）の意識
- ④ 高齢化社会の問題点それぞれについての整理

なお、④における整理方法は、(イ)精神(心理・生きがい・信仰・死への対応など)、(ロ)身体(健康・病气)、(ハ)家族(住居・居住形態)、(ニ)経済(収入・財産)、(ホ)就業(労働・雇用)の五項目を立て、高齢者の側から考えた問題点を挙げて整理した。

以上の研究内容については、別稿(教化学研究集会の発表要旨)を参照していただきたい。

最後に参考となる図書資料を列挙する。

○総務庁長官官房老人対策室編『高齢者問題の現状と施策』(大蔵省印刷局)

○経済企画庁総合計画局編『活力ある高齢社会を目指して——高齢社会への課題と対応——』(大蔵省印刷局)

○内閣総理大臣官房老人対策室編『老人の生活と意識 国際比較調査結果報告書』(大蔵省印刷局)

○森幹郎『老人問題解説事典』(中央法規)

○塚本哲『老後問題事典』(ドメス出版)

○『図説老人白書58年度版』(碩文社)

○『老人福祉年報58年度版』(全国社会福祉協議会)

(現宗研研究員・大島啓禎)

## 安楽死問題と日蓮宗教化

安楽死問題は、その歴史も古く、しかも医学や法律ばかりでなく、宗教・倫理・哲学などにわたる学際的問題として論じられてきた。今日では、安楽死だけでなく、

植物人間や「死ぬ権利」とともに、人間の死を見つめる現代の重大な問題として展開しており、安楽死から尊厳死へ、直接的な死から間接的な死へと論点も移りつつある。

この安楽死は、ギリシャ語のエウタナーシア(euthanasia、良き死、楽な死)にその語源を求めることができるが、一般に、不治の病の末期患者の苦痛を取り除くために死なせることを意味しており、ここでは耐え難い肉体的苦痛や回復不能の身体的損傷と、生命との関係が問題とされるのである。

一方、安楽死の問題が展開する中で、新たに尊厳死という問題も生じてきた。尊厳死(death with dignity)とは、人間らしく生き、人間らしく死ぬことこそ、人間の尊厳にとってふさわしいとして、「死ぬ権利」を唱え、例えば植物状態にまでなつて生きることは辞退するということを意味している。ここでは、死ぬ権利の是非と、及び延命医療の進歩の中から生まれた生命維持装置の差し控えや取り外しと、生命との関係が問題とされる。

さて、「安楽死問題と日蓮宗教化」というテーマの中

で、日蓮宗教化との関連は次年度に譲ることになっており、今回は安楽死の問題点を把握することに留め、次のような項目を立ててレポートを試みた。

まず最初に、問題の性格を理解する上で、安楽死及び尊厳死のことばの定義を明らかにし、両者の相違点も示してみた。

次に、従来の安楽死の概念には、歴史的な経緯や医学、法学などの立場の違いから、様々な分類の方法がとられているので、それらを紹介した。例えば、行為と死の因果関係や本人の意志に関する任意、非任意、不任意の上からの分類、積極的、消極的あるいは強制的か否か、狭義、広義という分類などである。

しかもこの問題は、古くて新しい問題である。そこで歴史的経緯を概観するため、(1)西欧における是非論の変遷、(2)我が国における戦後の安楽死事件の紹介、(3)尊厳死の提起——カレン事件、(4)安楽死から尊厳死への展開、および(5)安楽死問題を取り扱った文学作品、という項目を設けて整理してみた。

こうした上で、安楽死の是非について、従来唱えられ

てきた代表的な意見を整理してまとめ、安楽死是認論では、(1)是認の理由、(2)最近の是認論の方向、(3)日本尊厳死協会の活動などを取り上げて、その論拠を紹介した。

一方、否認論の立場からは、(1)反対の理由、(2)安楽死法の立法化に対する反論、(3)死ぬ権利に対する反論、(4)尊厳死の宣言書——「生者の遺言」(Living Will)に対する反論などを取り上げてみたが、特に反対論では刑法、医学、宗教、倫理などの多方面にわたっていることが注目された。

こうしてこの問題の性格と重大さを認識した上で、改めて安楽死に対する問題点を次のような観点から、整理し指摘してみた。すなわち、(1)何が問題となるのか、(2)医療上の問題点、(3)刑法上の問題点、(4)宗教上の問題点、(5)倫理上の問題点、(6)その他の問題点という項目にわけ総括的に把握しようとしてみた。この中で特に宗教者の立場から指摘された問題点や見解は、仏教やバチカン声明に見られるキリスト教のものなど、視野の相違はあるが、我々が大いに関心を寄せるところである。

さて、以上のように各項目の列記だけでその内容には

触れなかったが、この問題を多角的に取りあげることによつて、問題の概要をある程度把握することが出来たと  
思う。今後の課題は、日蓮宗教化との直接的なかわりを  
考察する点にあるので、その方向を最後に記しておく  
ことにする。

安楽死と日蓮宗教化を考えることは、日蓮教学にもと  
づいた死生観の上から、この問題を見つめていくことで  
ある。そのことは、「先ず臨終の事を習うて、後に他事を  
習うべし」という祖意に従うことにほかならない。具体  
的に言えば、我々日蓮宗教師は安楽死をどのように考え  
るのか、患者とその家族に対して安楽死で問題となる心  
身の苦痛、とりわけ心の苦痛に対しどのように信仰的な  
アプローチをしていけるか、教化の現場において、法華  
経信仰に導かれた生き方、死に方をどう説いていくかを  
考えることである。また安らかな死の受容という上から  
臨終正念、靈山往詣の教えなどをどのように語り説いて  
いくか、法華経に説かれる久遠の生命をどう認識させう  
るか、こうした点を考えていくことが必要と思われる。  
換言すれば、死の教化・死を見つめる教化のあり方を考

えていくことと言えよう。

同様に、死ぬ権利や生命の尊厳をどう捉え、死の判定  
で問題となる脳死をどう判断するか、これら現代社会が  
提起している諸問題に対し、法華経と日蓮聖人の教えの  
中から、その解答を求めよう試み、安楽死問題と日蓮  
宗教化のあり方を明らかにしていきたいと思う。

(現宗研究員・古河良皓)

## 核の問題と日蓮宗教化

「核」問題には、核兵器のほかに原子力発電・核廃棄  
物・放射能汚染などが考えられるが、一月中旬に、ソ連  
が「今世紀中の核兵器廃絶」を提案して歓迎されたよう  
に、核兵器への関心はとて大きい。

「核」問題を、次の四点で考えてみる。

### (1) 「核」の問題

①核爆弾(核分裂—原爆、核融合—水爆、核爆弾小  
型化—中性子爆弾)

②核兵器（戦術・戦域・戦略の区分、使用兵器によ

る区分）

③核戦争（全面・限定・偶発の区分、攻撃目標による区分）

(2)「核」の本質

①核爆発（爆風・熱線・電離放射線）

②核爆発の影響（疫学・放射能・大気・淡水・海洋

生物・農業・人間行動・生物・経済・食

糧）

(3)「核」の理解

①交戦国・交戦地域以外にも、大きな被害が出る――限られた核戦争であっても、他人事ではいられない。

い。

②日本は、東西陣営の両方の射程距離内にある――ソ連はアメリカの「核の海」による包囲におびえ、

アメリカはソ連の「核の傘」の拡大におびえる。

日本は、その傘の下にある。

③日本は、アメリカの北西太平洋核戦略の足場となつてゐる――核戦争の情報基地である日本は、必ず

攻撃される。

④限定核戦争や防衛のための軍備は、無意味である――先制攻撃への恐怖と誘惑のため、歯どめがきかない。

⑤核は米・ソ・英・仏・中が五万発を所有し、十六カ国に配備している――その威力はTNT火薬換算一三〇億トンで、人類一人あたり三トンである。

(4)「核」への提言

①おこり得る戦争である。

②太平洋戦争の被害実情などと比較にならないくらい、被害は大きい。

③日蓮宗パンフレット「地球をこわさないで」の普及。

④日蓮宗新聞昭和六十年七月一日号掲載の岩田妙澄尼「被爆体験記」の学習。

昭和六十年六月に研究発表のため、筆者が居住地の三重県四日市市の一般書店で二時間のうちに買い求めることの出来た「核問題」書籍資料は二十六冊あり、講談社刊『核いま地球は……』（六二〇円）は好書である。

同時に、日販コンピュータ書籍検索サービスを利用したところ、現在購入可能な「核問題」書籍一六〇冊が紹介された。

平和から平和が、という因果を見すえて、反核の意思表示、たとえば「非核寺院宣言」をするという提言の具体化など、布教と反核をむすびつけねば、いつか来た道に逆もどりという事態になりかねない。

寺が焼けた、出征した、被爆した、という戦争体験の聞き書き、過去帳からの戦死者調査など、戦争の悲惨を実感する機会は、たくさんある。

その悲惨の極が「核戦争」であり、その直接間接の被害は全地球的規模にわたる。大きさでなく、ホロコースト（みな殺し）につながる。限定的であろうと防衛的であろうと、ひとたび使用された核兵器は、かつてない悲惨を生む。

筆者の小学三年生の娘が、風濤社刊行絵本「地獄」を見て泣いたが、「核問題」を他人事のように考える人のなかにある「地獄」は現実にある。

生きていなかで考えねばならないことのひとつに、

「生きる」ことがある。この絵本は、「子どもたちよ、いのちをそまつにするな」としめくくっている。泣いた我が子を見て、未来への希望に暗い影をおとす「核」を正視することは、「立正安国」を宗旨とする日蓮宗教化の現実的課題であり、政治問題ではなくて「人間」問題である、と実感した。

（現宗研究員・伊藤立教）

## 都市化現象の中の寺檀関係と

### 日蓮宗教化——その一——

都市問題は、世界的な広がりを持つテーマであるとも、歴史的な課題である。

日本において、今日ほど重要な課題としてあげられ、あらゆる分野からのアプローチがなされたことはない。

三十年以前は、農村がやや多く、都市との人口バランスが保たれていた。今日、総人口の八割が都市人口である。都市問題は、そこに多くの人々が生活している広い

意味での環境問題である。

日本の都市問題は、短時日のうちに、農村人口から都市人口に急激な移動が行われたため、環境整備や機能の面で、そのたち遅れが目立ち、人間が快適に生活することができると都市環境にはほど遠い、非人間的、コンクリートジャングルの状況に置かれている。

昭和三十年代、戦後の復興が順調にのび、重化学工業を中核に、高度経済成長への緒についた。戦後の農業の変化、機械化、化学肥料、省力化が、教育水準の高い若年労働者を二次産業、都市へ吸引させた。国策による臨海工業地帯は、資源の乏しい日本が、輸入石油依存中心の工業を発達させ、高い生産性の労働力、高度な技術導入、開発によって、太平洋メガロポリスとよばれる巨大都市を形成させた。一次産業から二次、三次産業へと構造の変革を行い、農村（業）人口は激減して、過疎化が問題となり、一方、都市では過密問題が大きくクローズアップされた。

土地住宅問題、通信情報、交通戦争、福祉医療問題、都市自治の危機、核家族化、老人問題、青少年の非行、

環境破壊、汚染、騒音、犯罪、災害、人間疎外、孤独、価値観の多様化など、都市特有の問題と病弊を生んでいる。

都市は競争社会である。人間の欲望を刺激充足させる社会である。心のふれあい、安らぎは求められず、アスファルト、コンクリートジャングルの中で、ストレス・不安・イライラはつづり、人間砂漠といわれる。

ものの豊かさ、利便さ、文化の享受を満足させる快適な都市生活とは、相反する落とし穴がある。

都市人口の大部分は、社会増、地方農村出身である。社会的には「新中間層」とよび、宗教学的には「宗教浮動人口」とよぶ。かつての地縁的宗教とも切れ、都市の中での無宗教的環境に置かれている大多数の人々がいる。新興宗教の発展は、ここに布教拠点を置いている。日蓮宗は、これらの人々の悩みに応えているだろうか。都市移入者、未信者への都市開教へのとりくみ、宗教浮動人口へのアプローチが組織的に進められず、教師個人の努力に委ねられ、伝道宗門をめざすかけ声に止まり、一方、檀家の郊外移転、信行組織化、墓地問題、など檀

家制度の中でも、多様な教化対応が迫まられている。都市化現象の中での教化のあり方が、今大きな布教課題である。

(現宗研囑託・久住謙是)

## 環境問題と日蓮教化

一言で環境問題といっても非常に範囲が広く、種々な問題と、様々な捉え方があろうかと思うが、この表題からは、「公害」とか「宇宙船」「地球号」と思いうかべる方が多いと思う。そこで、ここではとりあえずこの辺を中心に考えて行く。

物質文明を突走った人間が、自然破壊や、自己の作り出した有害物質で、自分たち自身が暮しくくなつたというところで、悪い部分をこれ以上悪くしないと、少しでもよくするためには、日蓮宗としては教化の上で何をしていたらよいのか、ということを考えるのが研究的というわけである。

ただ、長者火宅の譬喩を借りていえば、我々僧侶も火宅の中にいる子供なのである(石油を使い、CO<sub>2</sub>や有害物質を出す元となる、電気・自動車・冷蔵庫——唐突な組合せであるが——の少なくともどれかを抵抗なく使っている僧侶が日本ではほとんどだろうと思う)。ただ、長者でなくとも、長者の教えを普段からよく聞いている子供ならば、聞いていない子供たちを導く手助け位はしたいので、そんな心構えて考えて行こうと思っている。

日蓮聖人は、民衆が飢え、病に倒れて苦しむのを、依正不二の考え方で見て、『立正安国論』を書かれ活動をした。今、私たちは聖人の思想・精神をどう活かし行動を起こしていったらよいか、という理論的なことと、火宅がどういう状況にあるかを判断するのに役立つ情報の提供をして行きたいと考えているが、まず手近なところからということ、僧侶の足元をかためるといふ意味からも、寺院に関係する環境問題から概要を示して考えて行く。

近所のビル工事などで井戸水が涸れた、日影になった、大気汚染で樹木が枯れた、というような、寺院の受ける

問題もあるが、周辺の人々等に与える問題もある。主に住宅密集地の寺院のことになるが、気が付いたことをあげると、

(1) 勤行や梵鐘等の音

(2) 落葉とその焼却の煙

(3) 蚊等の虫の発生

などの極地的な問題と、広い地域や環境一般に係る問題として、

(4) 除草剤、殺虫剤等の使用

(5) 郊外緑地での霊園の開発

(6) 子供の遊び場としての寺院の非開放、その他、境内や庭が「自然」という点からみると不自然なこと、などがあげられる。

一般の人の寺に対する環境面での寺のイメージとして、落ちついた雰囲気をもつ日本建築で、広く、静かで、手入れのゆきとどいた緑の多い境内……と、心のやすらぐ所というものが多いようである。これらは現代社会が失いつつあるものでもあり、仏教・寺院にとって無言の布教となっており、プラスの布教といえるであろう。反面、

細かい説明を欠くが、前掲の特に(2)と(3)はマイナスの布教になるのではないであろうか。

文句のつけにくい、自然現象や社会問題などスケールの大きい問題のかわりにヤリ玉にあげられる可能性が多いこと、一般社会常識に沿って行っていても、環境問題にかかわってくることもあるので、無批判に受け入れず、一考の余地があると考える。

寺院の運営上、合理化すべきこともあるが、経済的な「理」からだけでなく、仏の「理」にかなうものかどうか考えてみるのも重要なことだと思うので、このようなことから考えて行こうと考えている。

(現宗研研究員・常岡裕道)

## 環境汚染

——食品汚染について——

一口に環境汚染といっても、私達の環境をむしろむむのは複雑でかぎらない。六年程前に有吉佐和子の『複合

『汚染』が出版され、環境汚染が私達の生活の見えないところで、いかに進んでいるか思い知らされた。環境汚染の中でも、食物に対する農薬を中心とする汚染はなくなること知らない。農産物は旬のものを失う程に一年を通して店頭に並べられているが、そのみかえりとして、生産過程では大量の農薬を使用し無理をしている。ハウスものに代表されるキュウリ・トマト・ピーマンなどは、太陽光線の少ない湿度の高い植物にとつては異常環境の下で栽培される為、病虫害に弱いひ弱な作物になり、逆に病虫害は発生しやすくなる。ハウスものは露地ものに比較して数倍の農薬が使用されることになる。主食である稲作においても、種子消毒から始まり収穫に至るまで、十回程除草剤を含む農薬が使用されている。毎日飲むお茶も同じである。最近の機械稲作は、稲を見ず、さわらずして米が生産できるそうである。カレンダーに従って予防の名のもとに「病虫害を見ずして農薬を使う」といわれている。銘柄米といわれるコシヒカリ、ササニシキはそのさいたるものである。そしてその米はカメムシ加害の被害粒率(図表参照)によつて等級分けされる。この

白米の等級とカメムシ加害

等級	1	2	3	4	5	等外
米 1 d l (約 4,000~4,500粒)中に許されるカメムシ加害粒数(または%)	0.4以内	0.4以内	5以内	10以内	30以内	31以上5%まで

(全国一律 食糧検査内規による)

虫に稲の汁を吸われると、精白しても針の先程に黒班が残つて、これが千粒のうち二粒でもあれば、人体への害はなくても農林省が定める等級格付けの二等米に落される。四粒で三等米、八粒以上だと等外米になるから繰り返し農薬をまいて絶滅を期す。また豚やにわとりは、はやく太らせる為に運動させないので足が弱り病気にかかりやすくなる。その為に免疫抗生物質が餌と共に投与される。餌といつても、胃に負担をかけずに、しかも早く太るように研究されてきた各種栄養剤などが百種類近く混ぜてある。免疫抗生物質を投与しているにもかかわらず、肺炎や胃潰瘍の豚はあとをたたず、また最近では、がんの症状もみられ、それもわずか半年から

二年足らずの生育期間にかかるといふほど無理な食肉生産をしている。

葉におかされている食物は生物ばかりでない。食品の腐敗や変敗を防ぎ保存性を高める為に使う食品添加物、現在化学的合成品で約三百五十種類、天然の添加物で約七十六種類も使用されている。標準的な日本人の朝食・晩の献立を作り、そこで使われている食品添加物の種類を計算すると七十〜八十種類となる。これから試算すると、通常の食生活では、毎月10g程度を体内へ摂り込んでいると考えられている。

このように我々は毎月何十種類もの添加物を胃に注ぎこんでいるが、この事がある学者がネズミを使って研究した。バターなどの酸化防止剤であるBHA、ジャムや魚肉ねり製品の保存剤ゾルビン酸カリウム、パンや洋菓子の防腐剤プロピオン酸ナトリウムなどよく使われ問題のありそうな十三種類の食品添加物をネズミに与え、一年間変化を追った。すると、本来安全であるはずの濃度のさらに十倍もの余裕を残した場合でも、一カ月後には添加物の影響としか考えようのない肝臓や腎臓の肥大が

みられ、本来の安全濃度にまで上げると肝臓の一部が変化を起こすことがわかった。この研究の結果を我々人間に結びつけて考える事は短絡的であるが、添加物等が見えない形で私達の体の中に入り込んできているのは事実である。我々は添加物使用の第一世代である。子供や孫、さらにはその孫の代になった時、どのような影響がどうかは現在の科学の力ではわからない。今わかるのは、私達が自らの手で自らの体を実験台にしているという事だけである。

#### 〔参考資料〕

『食糧——何が起きているか——』朝日新聞経済部・朝日新聞社

『よくわかる食品添加物一問一答』藤原邦達監修・合同出版

『よくわかる農薬問題一問一答』藤原邦達監修・合同出版

『農薬なき農業は可能か』大串龍一・佃農山漁村文化協会

『複合汚染』有古佐和子・新潮社

# 家庭・家族問題と日蓮宗教化

— 家族社会学の紹介 —

「の家族問題」への対応が求められ今に至る。

## 2 現代家族の諸相

戦後の家族変動は、家・家族制度から夫婦家族中心の民主化への過程といえるが、地域や、職業によって速度・程度に相違がある。いくつかのタイプの家族が併存している。

- I 戦後復興期（一九四五～六〇年頃）— 家族制度の崩壊と夫婦関係中心の家族への民主化。家族問題は、労働問題、あるいは貧困問題に吸収されていた。
- II 高度経済成長期（一九六〇年頃～七五年頃）— 社会問題の拡大、多様化に照応して家族問題が独立範疇化し、現象的評論的には、マスコミ報道でも多様にとりあげられる（消費ブーム・公害・マイホーム主義・教育ママ）。

統計資料によれば、普通世帯平均人員の激減、核家族世帯・単独世帯、共働き夫婦の激増、離婚の増加など、急激な変化がみとれる。一方、実数のうえからは、直系家族世帯も増えており、現時点での家族変動は微妙である。

## 3 家族社会学的方法的基礎

産業化、都市化の進展を基軸として、社会規範・生活様式の変化を加えて、家族生活の変化を捉えようとするおおかたの視角は、家族問題の噴出によって、対応・再検討が迫られている。制度的研究から集団論的研究に性格を変えている。

- III 低成長期（一九七五年頃～現在）— 新しい性格を帯びた家族問題の噴出。青少年の家庭内暴力、非行の増加、子殺し・子捨て、専業主婦にあらわれてきた台所症候群、金属バット殺人事件。常識的に考えて、問題が起こりそうには思えない家族における事件の多発。人間疎外が消費生活にまで及んで「家族の危機」が表面化し、「休火山

①制度的アプローチ、②構造——機能アプローチ、③相互作用アプローチ、④場アプローチ、⑤発達アプローチ、⑥形態アプローチ、に整理する。これらは、「手がかり」であり、家族問題解明、家族未来展望の新しい理論構築が求められている。

## 4 家族社会学の新しい動向

望月嵩・本村汎編『現代家族の危機』（有斐閣、一九八〇年刊）が、発達アプローチによる研究として、評価されている。

- 1章 現代家族の生と死
- 2章 配偶者選択と結婚
- 3章 新婚期の家族形成
- 4章 社会的ネットワーク
- 5章 子どもの出生と親の役割
- 6章 共働き家族
- 7章 現代家族の教育機能
- 8章 中期の家族
- 9章 職場と家族
- 10章 老後の家族生活

家族の一生は、人間の生涯と同じように、形成↓拡大↓縮小↓消滅というサイクルをたどり、その各段階は、解決しておくべき生活課題をもっている。家族を崩壊にみちびくような危機は、この生活課題→発達課題が達成できないときに現われる（緊張・葛藤・逸脱・問題行動）とする。

## 5 日蓮宗教化

仏教学と社会学は、概念・領範を異にするが、教化の対象、その問題化に近似性がある。対社会・集団（浄土・本国土妙）、価値観・生きがい（本迹）、役割り取得・奉仕（菩薩行）、やすらぎ（安心）、孤立・孤独・連帯（仏縁・仏子の自覚、情操・情緒（仏教文化）。心理的、社会的成熟（信仰の相続）、人生相談、言説布教の事例の多くは、実証的研究の基礎資料となろう。

（現宗研研究員・蓮見高純）

## 心の病と日蓮宗教化

現代ほど人間の心の問題がクローズアップされている時代はない。日々、新聞やテレビで報道される出来事は、幼児から青年層はもとより、中年層そして老年層におよび、これまで予想もできなかったさまざまな問題を含んでおり、我々に大きな衝激を与えている。

子どもをめぐる諸問題もその範囲は広く、たとえば登

校拒否・非行・自殺・いじめ等々各々が大きな社会問題となつてゐる。また、おとなの世界に目を向けても、ノイローゼ・自殺・殺人等のほか高齢化社会に伴つて増加する多様な老人問題等、現代人は一人一人がまさに心の病を直視しなければならぬ状況に置かれてゐる。

この心の病という大きな問題に対して、はたして宗教はいかなる役割を担つてゐるのか、また日蓮宗は今日のような関わりをすべきであるのか等、日蓮宗教化との関わりの中でこの問題を考えてみたい。

はじめに、心の病というものを考えていく上で、その基礎となる臨床心理学的側面から、私自身の臨床経験等もふまえて、特に児童臨床心理を中心に論を進めたい。身体の疾患にくらべ、心の病は外から気付かれにくくそのメカニズムも複雑である。しかしその心の病といえども、その人の外に行動として表われてはじめて問題となるのである。そこで、行動異常というものについて考えねばならない。たとえば、不安・フラストレーション・葛藤・ストレスなども、我々日常的に体験するものであるが、これらも実は行動異常と呼ばれるものである。し

かしいずれも程度問題であり、それによつて社会への適応が困難となれば問題であらう。

さまざまな行動異常に対して心理臨床活動を行なつていくことになるが、その対象を子どもの分野に限つても多様である。たとえば、指しゃぶり・爪かみにはじまり言語発達の障害・精神発達の障害・遺尿・頻尿・夜尿等の排泄の障害・吃音・チック・自慰・緘黙・登校(園)拒否・非行・自閉症・いじめ・自殺・暴力問題・神経症的症状等々多岐に亘つており、その原因も単一ではなく、複雑な場合が多い。

このような訴えに対して心理療法を行うことになるが、多くの場合、面接治療(母親を含めたカウンセリング)と並行して遊戯療法を行うことになる。そして場合により各種の心理テストを施行したり、専門の他機関に依頼するとか、医療機関を紹介して精密検査を行うことも起り得る。

以上のような心理臨床の概略をふまえ、いくつかの事例を検討した(略)。

これらの事例研究からも言えることであるが、今日の

子どもをとりまく諸問題を考えていくにつれて、育児ノイローゼ・過保護・進学塾の問題などが示すように、その子の母親（両親あるいは家庭）の問題、あるいはおとなの側の問題、さらには現代社会の問題を切り離して考えることはできない。

今後の課題ではあるが、このような大きな問題に対して、宗教信仰というものがいかに関わっていくのか、臨床心理と宗教心理の立場から検討していく。また、特に日蓮宗教化との関わりで心の病を考えていく時、重要なのは、次代を背負う子どもと、そして女性（母親を含む）の教化ではないだろうか。

（現宗研究員・渡部公容）